

イスカリオテのユダはどのように描かれているか

レディー・ガガ、『聖☆おにいさん』、
《ジーザス・クライスト・スーパースター》¹

水 野 隆 一

方法について

論者は、ヘブライ語聖書の文芸批評を専門にしている。聖書の研究というと、日本では歴史的批判的研究が主流であるが、現在あるテキストを共時的に分析することを中心に研究している。主な関心は、テキストがどのように編み上げられているかであり、それに、読者の反応を加味して、ヘブライ語聖書、とくに、その物語の解釈について研究している。さらに、あるテキストと他のテキストの関係を、ヘブライ語聖書内、あるいは、新約聖書のテキスト、さらには、ユダヤ教、キリスト教における解釈などへとその範囲を広げながら読んでいる。いわゆる、「間テキスト性」に着目した読みを行っている。また、論者は、イデオロギー批評、フェミニズム批評に影響を受けている。

聖書学においても、これまで解釈として取り上げてきた、学問的、神学的、信仰的解釈（主には文書として記されたもの）からさらに、絵画や彫刻、音楽、戯曲などの芸術作品における解釈に目が向けられるようになっている²。これら芸術作品における解釈は、キリスト教の「公式見解」とは大きく異なるものが提示されていて、興味深い。そして、現代文化においては、映画やマンガなどにおいても、独自の解釈が含まれていることがある。

映画、音楽、マンガなど、聖書の物語を解釈した作品に触れると、聖書そのものの読み方も影響される。作品に触れ、それを鑑賞するのも、聖書を読むのも、ひとりの人間が

1 本論は、関西学院大学キリスト教と文化研究センターの研究プロジェクト「現代文化とキリスト教」の研究会（2013年7月）での発表を基に、加筆修正したものである。

2 聖書学では「受容史」という言葉で呼ばれることが多い。*Blackwell Bible Commentaries* という註解シリーズでは、この受容史を中心に記述されている。

行うのだから、それらは切り離された別の作業として行われるのではなく、ひとりの人間の中で結びつけられていく。「間テクスツ的」という言葉で言われている作用がそこには起きているのであり、新しい読みが生まれてくる。生まれてくるだけでなく、同様の読みの手法を、異なるジャンルの作品に対して意識的に行うことが有効だと考えている。それらの読みを適切な言葉で語れば、そこには新しい批評の生まれることが期待される。

この際、ヘブライ語聖書の研究を行う者がその研究によって培ってきた「読み方」に基づいて、マンガや音楽、舞台芸術を「読む」ということが行われうると、最近では考えられるようになってきた³。論者も、ヘブライ語聖書の解釈において論者が用いている方法を用いて、現代文化に表されている聖書の解釈を読んでいく。

イスカリオテのユダについて

イスカリオテのユダは、イエスの十二人の弟子の一人でありながら、登場の瞬間から、「このユダがイエスを裏切った」と書かれている（マルコ3:19並行）。キリスト教会においては、ごく初期から、裏切り者として認識されていたといえる。イエスがベタニアのある家で食事をしていたとき、ある女性が「300デナリ」以上する香油をイエスに注ぎかけたのを見て、「無駄遣い」を非難する。マルコでは、非難するのはイスカリオテのユダではなく、弟子たちである（マルコ14:4）。私たちにはユダが非難しているとすり込まれているが、それは「ヨハネ版」である（ヨハネ12:4）。

この女性は、後に、マグダラのマリアだということになっていくが、それはラザロの姉妹マリアとマグダラのマリアを混同していった結果である。彼女が娼婦であったとも書いていないが、いくつかの読み込みが重なっていった結果、マグダラのマリアは娼婦であって、ベタニアで香油を注ぎかけた女性になる。これは、後で見る、《ジーザス・クライスト・スーパースター》でのマリアの描かれ方と関係している。

ユダは、過越の食事の席で裏切りを予見され、「生まれなかった方がよかった」と言わ

³ このような方法は、庄司宏子編著『絵の中の物語——文学者が絵を読むとは』（法政大学出版局、2013年）において試みられている。この書物に論考を寄せている研究者は皆、文学研究者であり、その研究によって培った「読み方」で絵画を「読む」試みをしている。

れている（マルコ14:21並行）。この言葉がイエスに遡るかどうかは別として、マルコによる福音書が書かれる段階から、ユダがすでに「裏切り者」として知られていたことが分かる。

ユダについての記述に着目すると、奇妙な点がある。ユダが裏切った動機は、はっきりとは書かれていない。「銀30枚」という報酬について記されているが、おそらく、ゼカリヤ書の記述（11:12）に基づく記述だろう⁴。本当のところはよく分からない。また、イエスを裏切った後、マタイによれば、ユダの後悔が記されている（27:3）。自死に至ったことは、マタイと使徒言行録にあるが、その様子が異なる（マタイ27:5、使徒1:18）。

とすると、丁寧に聖書を読むと、このユダという人物は、本当は何者で、動機はどこにあったのか、何をしたかったのかという疑問が起きてくる。それへの答えの1つが、近年取り上げられるようになった『ユダの福音書』であろう。これは、グノーシス文書で、聖書学としては、後の時代のものとして、「史的イエス」についての証言は得られないだろうと考えられるが、この中では、ユダだけがイエスを真に理解しているとされている。このような文書が話題になり関心を寄せられたのは、ユダへの関心と表裏一体となっていると言ってよいであろう。

1 レディー・ガガ《Judas》

この曲は、2011年に発表された*Born This Way*というアルバムに収録されている。*Born This Way*はタイトル曲も含めて、刺激的な曲が多く収録されている⁵。

この曲は、最初からはっきりと、“I’m in love with Judas”と歌い始める。Judasは、英

4 福音書（とくにマタイによる福音書）、ことに、イエスの受難物語は、イエスの出来事がヘブライ語聖書に記されている預言の実現であるという「説得」の方法をとっている。そのため、起こったことをヘブライ語聖書の記述に合わせて解釈したり、甚だしい場合は、ヘブライ語聖書の記述に合わせた出来事を創作したりしている。裏切りの報酬について、マルコによる福音書やルカによる福音書が具体的な値を記していないことを考慮すると、マタイによる福音書がこれを「預言の実現」として描きだしたことが分かる。また、ユダが自死をした後、この銀貨で畑を購入するのもマタイによる福音書だけにあり（マタイ27:7）、祖国滅亡という危機を目前にしているにもかかわらず故郷の土地を購入したことを通して、エレミヤが行った預言的行為（32章）の成就を読み込んだからであろう。

5 Lady Gaga. “Judas,” in *Born This Way*, Milwaukee: Hal Leonard Corporation, 2011, pp.32-39.

語圏では、「イスカリオテ」とは言われていなくても、イスカリオテのユダを指す。

ユダへの愛によって始まる《Judas》であるが、すぐに続けて、“I wanna love you, But something’s pulling me away from you”と言って、ユダを愛することを妨げる何かが存在することをほのめかす。続く部分では、“Jesus is my virtue, Judas is the demon I cling to”と歌われており、ユダはイエスとの対比の中に置かれていることが分かる。イエスが“virtue”（徳、貞操を守る相手）と言われているのに対し、ユダは“the demon I cling to”と呼ばれている。“Demon”は「悪魔」であるが、それだけでなく、“virtue”の対になるものであるが、それにもかかわらず、そこには強い執着（“I cling to”）が表されている。ユダへの愛とイエスへの「貞操」に引き裂かれている歌い手の心情を読みとることができる。

人名の他にも、聖書的な表現が見られる。“I’ll wash his feet with my hair”は、ベタニアでの塗油（マルコ14:3～9並行）が念頭にあるのだろう。また、“Even after three times, he betrays me”には、ペトロが3度イエスを知らないと言ったこと（マルコ14:66～72並行）がほのめかされているのかもしれない。“I’ve learned our love is like a brick Build a house or sink a dead body”もイエスのたとえ（マタイ7:24～27）から取られた表現だろうし、“In the most Biblical sense”というような言葉もある。

キリスト教会の保守的な人々は、イスカリオテのユダに対する恋愛感情を表現することを批判している。レディー・ガガはこれに対し、「私がこのビデオで非難されるべきことがあるとすれば、2つのブランドを同じシーンで一緒に着たことくらい」と応答している⁶。

《Judas》のプロモーションビデオでは、レディー・ガガ扮する女性は、イエスのバイクの後ろに乗っている。また、イエスとユダと共に、同じバスタブに浸かっているシーンもある。最後にこの女性は、ウェディングドレスとおぼしき白い衣装で石打ちの刑に処せられる。石打ちの刑は、姦淫の罪に対する罰である（ヨハネ8:1～11）。ヨハネの記事がほのめかされていることや、前述したマグダラのマリアへの関心から、レディー・ガガが扮している女性はマグダラのマリアであると、一般には受け止められている。

ユダとイエスを対比する歌詞からも、また、プロモーションビデオでの「処刑」の様子か

6 *The Christian Post* 電子版の記事、“Lady Gaga’s ‘Judas,’ Anything But a Religious Statement?” (2011年5月7日付) による。

<http://www.christianpost.com/news/lady-gagas-judas-anything-but-a-religious-statement-50133/>

らも、ユダを愛することの「反社会性」「反体制性」は、十分に認識されていると思われる。そして、イエスは“virtue”と呼ばれているが、この楽曲には（そして、プロモーションビデオにも）イエスに対するアンビヴァレントな態度が表されている。イエスを求めるべきであることは理解されながらも、その対称的な位置に置かれているユダに惹かれ、引き裂かれているのである。この楽曲が表現しているのは、アンビヴァレンスであり、アンビヴァレントな生き方の対象、象徴がユダだと思われる。そして、そのアンビヴァレンスは、ユダとイエスを対比することによって、イエスに対しても向けられることになる。

2 『聖☆おにいさん』におけるユダ

『聖☆おにいさん』は中村光によるマンガで、2006年から『モーニング・ツー』（講談社）で連載されており（現在も連載中）、2008年からコミック化されて現在9巻まで出版されている。講談社のホームページによれば、「目覚めた人ブツダ、神の子イエス。世紀末を無事に越えた二人は、東京・立川でアパートをシェアし、下界でバカンスを過ごしていた。近所のおばあちゃんのように、細かいお金を気にするブツダ。衝動買いが多いイエス。そんな“最聖”コンビの立川デイズ。」と紹介されている⁷。大学生の間ではよく読まれているようであるし、『キリスト新聞』が作者のインタビュー記事を載せていた。

『聖☆おにいさん』においてユダは、11回、登場、ないし言及されている（2巻、7巻にはなし）。そんなに多い方ではない。ペトロや4人の大天使と比べて、多いわけでもない。絵付きで言及されるのは、5回（[6巻] 37話、39話、42話、[8巻] 51話、57話）⁸であり、「がっかりの度合いを表す「ユダ級」は2回言及されている（[1巻] 8話、[3巻] 22話）。ちなみに、「ユダ級」よりもひどい場合は「ディーバダツタ（提婆達多）級」となる。ユダが物語の中に登場してくるのは1回のみである（[5巻] 35話）。

イエスの「復活」の日は、弟子たちにとっては「ドッキリ」の日だったので、イースターは弟子たちがイエスに「ドッキリ」を仕掛ける日という設定になっている。この日の「ドッキ

⁷ <http://morning.moae.jp/lineup/25>

⁸ 以下『聖☆おにいさん』への言及はコミックに基づき、コミックの巻数を[○巻]で、それぞれのエピソードを「○○話」と示す。

り」は、ペトロとアンデレが仏門に帰依したというものであったが、イエスは早々にそれを見破り、隠しカメラを見つけてしまう。その騒動の最後に、「一人忘れていた」としてユダが登場する。「『産まれてこないほうがその者のためによかった』ってイエス様のセリフ……あれには心底ドッキリしましたけどね」と言う。しかし、これも「ドッキリ」だった。

登場するのはこの1回だけであるが、その向かいのページには、ユダが「床で食べますとも、ユダなんで（笑）」と言うのを聞いて、イエスが、「私の右側に座りなさいユダ!!!」と言っている。「右側」は、マタイ25:31以下の記事を思い起こさせる。そこでは、「右側にいる人たちは」「わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」と言われる。あるいは、ゼバダイの子たちがイエスに、イエスの右と左に座る者にして欲しいと言った記事（マルコ10:35～45並行）も連想させる。

『聖☆おにいさん』を読む限り、物語が進むにつれてキリスト教に関する知識は段々と増えており、それも、トリビアなものが目立つ。

地獄にいたユダの様子は、[6巻] 39話で描かれている。地縛霊が多すぎて天界に行く人が少なくなっている事態を打開するために「天界ツアー」や「地獄ツアー」を組んではどうかと話している中で言及される。行けないかもしれない天界よりも、行く可能性のある地獄を見せるという企画について話す中で、裏切り者の行く地獄の最下層で、ユダは、ユリウス・カエサルを裏切ったブルータスとカシウスと友人になったと言われている。

イエスによって「(イエスを)裏切ってしまったという悩みは重すぎて、誰にも相談できないって思ってたみたいなんだけど——……ブルータスとカシウスは親身になって聞いてくれたって…」と語られているが、その遠景の中でブルータスは、「『お前もかブルータス』ってセリフ、言われすぎてもうゲシュタルト崩壊!!」と言う。カシウスも、「俺らほんとバカなことしたよなー!!!」と答えている。イエスによれば、ユダは「免罪符（後述）で脱地獄してからカエサルの所に通ってブルータスを許してやってって頼み込んでいる」。これを聞いたブツダは、「友情はどこにでも花咲くんだね……」と感想を述べる。とても「ゆるい」まとめであると感じられる。

「免罪符」については、これよりも先に[3巻] 22話で触れられている。生活費に困ったブツダとイエスが、不要になったものを売って、生活費を稼ごうとしている。ブツダは、そ

れまで買い揃えてきた手塚治虫のマンガを売ろうと考えている⁹。イエスが出してきたのが、かつて弟子たちに配った手作りの「免罪符」である。「一時期飛ぶように売っていた」とされるが、続いて、ルターの似顔が出て来て、「免罪符は売っちゃいけないよ!!」とイエスは思い返す。ブッダも、ブックオフもそれは買い取らないだろうと言う。

この話の最後に、「免罪符」とユダの関係について言及される。何を指しているか分からないが「感謝祭」の時に配った「5枚つづり」で、イエスは、「教会発行のものとは違って効力あるんだよ!」と言う。使い切ったのはユダだけだった。「紙一枚で」あの裏切りを許したのかといぶかるブッダに対して、イエスは、「5枚全部合わせてだよ……」と説明する。この後、このマンガではあまり登場しない語り手の声で「神の子のアガペー プライスレスです」とまとめられる。

イエスを裏切ったことで一旦は最下層の地獄に落とされたが、「効力のあるイエス手作りの「免罪符」「5枚つづり」全部を使って地獄を脱出することができた。その後、イースターの「ドッキリ」で見たように、弟子たちと行動を共にしている。

このようなユダの描写は、「神の子のアガペー プライスレスです」とまとめられるが、日本の（聖書の）読み手のキリスト教に対する期待を反映しているのではないかと考えられる。ユダのような、許されない裏切り者でさえ、イエス自身が作ったとはいえ、「免罪符」によって地獄を脱出することができる。カトリック神学において、地獄は脱出することができないものであり、人生における善行の足りなかった者は「煉獄」に行って清められ、天国に行くと考えられている。しかし、その地獄すら脱出することができるという表現に、こういう宗教であって欲しい、こういう信仰であって欲しいという、日本人から見た、キリスト教的な「愛」への期待が見て取れる。

このような「愛」や「ゆるし」への期待によって、『聖☆おにいさん』全体が軽いタッチになっていることは事実であろう。ユダが「許される」という発想の中からは、レディー・ガガ《Judas》のような、イエスとユダを対称的に“virtue”と“demon”とするような表現は出てこないだろう。《Judas》においては、「ユダを愛する」という表現の持つインパクトの強さは、十分に認識されている。一方、『聖☆おにいさん』におけるユダは、ゆるされ、再び、

9 イエスはこれを「魂を売るようなもんじゃない?」と驚くが、ブッダは「『火の鳥』と『ブッダ』だけは売らないさ」と応じる。

イエスの弟子たちと、また、イエス自身との関係を持つに至っている。

ブツダとイエスが、実在の人物として、現代日本社会において一間のアパートで共同生活をしているという設定自体が宗教的土壌を反映しているし、キリスト教にせよ、仏教にせよ、宗教が説く「愛」や「慈悲」が徹底されることを求めていると言えるのではないか¹⁰。それを端的に示すのが、ユダの描かれ方であると言える。

3 《ジーザス・クライスト・スーパースター》

《ジーザス・クライスト・スーパースター》は、ティム・ライス（作詞・脚本）とアンドルー・ロイド・ウェバー（作曲）による舞台作品で、“A Rock Opera”と題されている。1970年にアルバム（LP2枚組）として発売されたので、その段階では「オラトリオのような作品」であった¹¹。1971年にはブロードウェイで舞台化され、1972年にロンドンで初演される。その後、ロンドンでは1980年までロングランとなった。1973年には、ノーマン・ジュイソン監督によって映画化されている¹²。

このロック・オペラには、イエスの他、重要な登場人物として、以下の人物が描かれている¹³。

1. イスカリオテのユダ
2. マグダラのマリア
3. 熱心党のシモン
4. ピラト

10 キリスト教に対する「期待」についてさらに考えるためには、『聖☆おにいさん』におけるルシファーの扱いについても分析の必要があると思われる。『聖☆おにいさん』においては、ルシファーは大天使ミカエルの兄とされており、天上の戦いも、この二人の兄弟喧嘩だったとされている（[5巻] 32話）。ルシファーは、実は優しく、繊細な気遣いをする「兄」的な登場人物として描かれている。

11 ロンドン初演40周年を記念してイギリスで行われたアリーナツアーを収録したDVD(Universal 8291943)の特典映像、ウェバーへのインタビュー映像から。

12 同じインタビュー映像で、ウェバーは、ブロードウェイの演出も、映画化されたされたものも、気に入らなかったと述べている。

13 歌詞や音楽の分析は、次の楽譜に基づいている。*Jesus Christ Superstar: A Rock Opera by Andrew Lloyd Webber and Tim Rice, Piano/Vocal Selection*. London: Wise Publications, 2012.

それぞれの登場人物が興味深く描かれている。今回はイスカリオテのユダにだけ焦点を当てるが、ピラトについて、一言述べておきたい。

ピラトは、イエスの本質を見抜いているかもしれない人物として描かれていると思われる。というのも、裁判の場面（[Trial Before Pilate]¹⁴）ではイエスを助けようとしているが、イエスの頑なな態度と祭司長たちによる脅迫によって、最後にはイエスに死刑を宣告してこう言うのだ。“Die if you want to, you, innocent puppet!” イエスが「無実、無辜」あるいは「お人好し、無知」であり、「操り人形」「傀儡」、つまり、自分の意志ではなく他の者の意志¹⁵によって動かされているものに過ぎないと言い切っている。

この登場人物たちの中で、物語の鍵となるのはユダである。

a. Heaven on Their Minds

「序曲」に続く最初のナンバーはユダによるもので（[Heaven on Their Minds]）、イエスの行く末を案じる内容を歌う。カリヤでイエスが行ったことは「良かった（good thing）」のに、人々はイエスを「メシア」だと言い始め、イエスもその言葉を信じ始めている。このままでは自分たちに破滅が待っていると、恐れている。ユダは、人々の熱狂の中で、自分だけが事態を見抜いている（“My mind is clearer now, at last all to well I can see where we all soon will be.”）と考えている。では、このようなユダはなぜ、イエスを裏切ったのか。

b. Damned for All Time ~ Blood Money

ユダはアンナスとカイアファスのところにきて、イエスについての情報を伝える（[Damned for All Time ~ Blood Money]）が、その際も、「すべてのことをよく考え抜いた結果だ（“I weighed the whole thing up before I came to you”）」と言うだけで、具体的な内容に踏み込まない。従って、観客はその心情を読み込むしかない。直前にイエスとマグダラのマリヤとの親密な場面（[Everything's Alright ~ I Don't Know How to Love Him]）がある

14 以下、《ジーザス・クライスト・スーパースター》の場面は[]で表す。

15 ただし、直接に「神」とは言っていない。この物語では、「神」は言及されるだけ、あるいは、ほめられるだけで、登場はしない。

ので、そのことと関係があると、観客は解釈するかもしれない（後述参照）。あるいは、神殿から商売人たちを追い出した出来事（[The Temple]）によって危機感を強めたのかもしれない。

カイアファスはユダに報酬を受け取らせるために、この銀貨を使って、慈善事業に寄付できると言う（“Choose any charity——give to the poor.”）。これが決め手になったとすれば、ヨハネ12:5のユダの発言、「なぜ、この香油を300デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」を踏まえた人物造形となっていると言えるだろう。

[Blood Money] の最後には、このロック・オペラでは珍しい、協和音に基づく合唱で、“Well done, Judas, Good old Judas” と歌われる。これがだれの声であるのか明らかでないが、伝統的な宗教音楽のスタイルに近い混声合唱で歌われることを考えると、興味深い（これについても、後述参照）。

c. Judas' Death

[Judas' Death] と題された場面は、次のように構成されており、すべての音楽は、既に物語で使われたものが引用されている（カッコ内に初出の場面を示した）。

- A. ユダと祭司長たち（[Damned for All Time]）
- B. 独白1（[I Don't Know How to Love Him]）
- C. 独白2（[Heaven on Their Minds]）
- D. 合唱（[Blood Money] 最後の合唱）

物語の進行で用いられていた音楽の引用でできているということは、この場面は、物語を締めくくる、それも、登場人物ユダが死ぬので、ユダの観点から見た物語の結末を、描いていると言っていいであろう。

この場面では、ユダの感情は、先に歌われたマグダラのマリアの感情と類比、あるいは対比されている（B. 独白1）。というのもこの部分の音楽は、マグダラのマリアのソロ [I Don't Know How to Love Him] をほとんどそのまま繰り返しているからである。祭司長たちにイエスを引き渡す約束をする直前にイエスとマリアとの親密な場面があるという《ジー

ザス・クライスト・スーパースター》の構成から、この二人の関係がユダを裏切りに追い込んだとも読めるし、音楽的にもこのようにして関連づけられている。

この場面を見ると、いくつかの疑問が起こってくる。ユダは物語の最初で、何「はっきりと分かった」と歌っていたが、この場面では“My heart is in dark”と、「分からなくなっている」状態にあると告白している。

この場面の最後に現れる「D. 合唱」の部分は、歌詞は異なるが[Blood Money]最後の合唱を繰り返したものである。ここでも、だれの声なのかは明らかではない。ただ、伝統的な宗教音楽に近い混声合唱で歌われることから、1. 伝統主義者、物語の中では、祭司長たちや民の指導者たち、2. ピラトのセリフ(“Die if you want to, you, innocent puppet!”)やユダの言葉(“God! I’ll never ever know why you chose me . . . for your foul bloody crime.”)から、現れないが物語を操っている「神」ないしは「天使」などが考えられる。

c. Superstar

「序曲」で提示された「ジーザス・クライスト・スーパースターのテーマ」とソロとが交互に現れる。テーマが再び、そして、物語の中ではじめて演奏されるが、それは、イエスが十字架に磔にされる場面である。「スーパースター」とは、十字架に磔にされるイエスを指す語であることが分かる。

“Soul’ Style”と呼ばれているソロは、ユダの声で歌われる。もちろん、ユダを演じた人物は、舞台の上に再び登場する。ソロは、次の3つの問いを畳みかけるように歌う。

“Who are you?”

“What have you sacrificed?”

“Do you think you’re what they say you are?”

これらの問いは、実には、劇中でも暗に問われていたのであるか¹⁶、[Judas’ Death] で

16 例えば、“Do you think you’re what they say you are?”という問いについては、[Heaven on Their Minds]においてユダが、“You’ve started to believe the things they say of you”と言って

死んだはずのユダに問わせているのは、ユダも結局は分からなくなって死んだということを表しているだろう。従って、ユダの問いは答えられないままになってしまったのである。ユダが答えを得られなかった問いは問いのままであり続け、このロック・オペラを見る、あるいは聴く者の問いとして残り続ける。

とくに、第3の“Do you think you're what they say you are?”という問いは、劇中でイエスが尋問に答えた答え、“That's what you say”やそれに類する言葉に対する基づく問いかけである。このイエスの返答は、聖書の言葉をそのまま引用しており（マルコ15:2、ルカ22:70、23:3、ヨハネ18:37）、[Superstar]の場面における問いかけは、この作品の枠を越えて、福音書に描かれたイエス自身へと向けられる仕組みとなっている。そのような巧みな仕方、この作品の主題「イエス・キリストとは何者か」という問いが提示されることになる。

これは私見であるが、音楽的には「ジーザス・クライスト・スーパースターのテーマ」が再提示され、内容的にはユダの声を借りた作品の主題が示されたので、作品としてはここで終わってもよかったと思われる。ただ、イエスの物語がよく知られているイギリスやアメリカでは、イエスの死を描かずには終われなかったのだろう、イエスが十字架上で語ったとされる言葉を歌う[The Crucifixion]という場面と、それに続けて、器楽曲“John Nineteen Forty-One”¹⁷が演奏される。

2000年ブロードウェイ演出を映像化したDVD¹⁸では、縊死したユダが落ちていったところからイエスが現れ、鞭打たれるように描かれているが、二人の関係を暗示した、見事な演出と言えよう。さらには、イエスが釘打たれたときに苦痛の声を上げるのはユダであるという演出も、二人の「近さ」を表現していると思われる。

このように、親密で理解したいと思っていたからこそ、ユダはイエスのことが分からなくなり、イエスを売り渡してしまうことになった。ここには、ユダのアンビヴァレンスが描かれてい

いた。また、“Who are you?”という問いについては、[Simon Zealotes]でシモンによって“Christ, what more do you need to convince you That you've made it and you're easily as strong As the filth from Rome”と歌われていた。

17 ヨハネ19:41「イエスが十字架につけられた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった」。「埋葬」という言葉は使われていないが、この聖書箇所を示すことによって、イエスの埋葬がほめかされている。

18 Gale Edwards演出。Universal UUSD-70078

る。そして、ユダは、現代の聴衆がイエスに対して感じているアンビヴァレンスを代表している存在だと言えるだろう。

おわりに

ここまで、レディー・ガガ《Judas》、『聖☆おにいさん』、《ジーザス・クライスト・スーパースター》を取り上げ、ユダの描かれ方を見てきた。表現様式も、また、前提としているユダ像（キリスト教という基盤の物語を持つかどうかの違いによって、その感覚は異なっていた）も違うのだが、これらの作品においては、ユダという存在の「アンビヴァレンス」が共通していると言ってよいだろう。

最初に見たように、新約聖書に描かれているユダそのものがアンビヴァレントな存在であった。そして、キリスト教における伝統的な解釈もアンビヴァレントなものであった。このアンビヴァレンスゆえに、ユダは、読者の興味を引き付けてきたと言えるだろう。というのも、アンビヴァレンスは、読み手に問いを投げかけるからである。「あなたはこのユダに何を期待するのか。」「あなたはどのようにこのユダを見るのか。」そして、この問いに対する答は、イエス像やキリスト教に対する見方と無関係ではない。今回取り上げた作品によって、読者・聴き手は、これまでの読みや解釈を問い直すよう促されるのである。